

13 文化・学芸

(第三種郵便物認可)

寄稿

佐賀県立博物館・佐賀県立美術館学芸員 浦川和也

「きのつから一睡もできま
せん。押し潰されて亡くなっ
たお2人のうち、1人は、私
の大切な友人でした。フリー
アルバイターの野村昭嘉さん
(26)。新聞には、そう載って
います」。

今から22年前、1991年
3月16日、野村昭嘉(佐賀市
諸富町出身)は、東京都立川
市で起こった杭打ち機(百ト
ン)転倒事故の犠牲になった。
銀座での初個展に向けて毎夜
遅くまで制作に取り組んでい
た矢先のことだった。

冒頭の文章は、漫画家の西
原恵三さんが、事故直後に
書いたエッセー「死んだのは
ひとりの芸術家でした」の一
節だ(『怒濤の虫』)。西原
さんは、美大受験予備校の立
川美術学院で、野村と同級生
だった。

西原さんは、野村について
「芸術家を()に()する者()」

野村昭嘉を語る言葉

「作品の力」に心動く

命を売ってでも欲しいと思う
『才能』があったのです。い
つか世に出る人だと、私たち
全員が確信していました。彼



事故で傷んだ後修復された「雨雲の柩Ⅱ」(1988年、アクリル板 72.4cm×60.4cm、佐賀県立美術館蔵)

この怒りや無念の思いは、野
村にかかわるすべての人に共
通する思いだ。

事故当日、立川署で遺体を
確認した友人の濱田美樹夫さ
んは「事故の処理が終わり、
奴の残した物からは、ひたむ
きさと純粹さしかつかない知
ることはなく、それゆえに遺
された者の怒りは計り知れな
い」と語った。

修復を手掛けた絵画保存研
究所の小谷野匡子さんは、運
び込まれた作品を見て「何と
も痛ましい状態であるにもか
かわらず、事故の傷は作品の
一部として同化し、以前から
その姿であったとしても思
議ではないような堂々とした
たたずまい」だったと同様し

野村自身は、制作ノートの
中で自らの作品を「風化した
壁画のようなもの」と言い、
太古と未来とを共存させた
「奇妙な懐かしさ」を追求し
ていた。空を漂い雲を吐き出
す「雲の製造」、ナウシカを
想起する「雨雲の柩」、タ
コ・クジラ・パイプ・ナイフ
などの不思議な絵の数々は、
いずれも野村が目指した「奇
妙な懐かしさ」のイメージだ。

美術評論家の倉林靖さん
は、「これらの作品は〈未完
の才能〉どころではない、永
続的に語り継がれるべき名
作である」と断言したい」と
言う。また、目黒区美術館
学芸員の正木基さんは、回顧

展開催・作品修復・作品集刊
行など野村作品を世に出そう
と尽力した人々の推進力は、
何より「野村昭嘉の〈作品の
力〉であったことは、論を待
たない」と指摘している。

佐賀が生み、心ならずも天

逝した画家野村昭嘉。その作
品をぜひ見てほしい。あなた
も、「作品の力」に心動くこ
とだろう。

▽天逝の画家 野村昭嘉
展は、6日～10月20日に県立
美術館で開催。



紙面編集・小石克、南里美紀

才能が注目され、期待を集めながらも26歳で亡くなった野村昭嘉さん

天折

Life

月曜 衣・食・住

火曜 文化・学芸

水曜 若者・教育

木曜 余暇・趣味

金曜 文化・学芸

土曜 映画